

学生が児童に運動機会を提供するシステムの開発に関する研究

鈴木 聡（東京学芸大学健康・スポーツ科学講座体育科教育分野）

○佐藤洋平（東京学芸大学附属竹早小学校）

小森伸一（東京学芸大学健康・スポーツ科学講座体育学分野）

松井直樹（東京学芸大学附属大泉小学校）

隈部 文（東京学芸大学附属小金井小学校）

代表者連絡先：satoshi@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】 教育支援、子どもの放課後運動遊び、学生

1 はじめに

スポーツ庁が公表した「令和3年度全国体力・運動能力、運動習慣調査」では、体力合計点がコロナ禍以前と比較して低下し、運動時間が4割減ったことが報告された。そのような中で、小学校においても子どもたちの運動時間の確保や体力向上は喫緊の課題となっている。本研究では、学生が児童に運動機会を提供するシステム開発を試み、体育科年間カリキュラムと連動させながら運動内容の開発とプログラム運営を実施し、両者がコラボレーションしながらシステム構築していくことを目指したものである。また、発達障害を持つ児童が運動に親しむことができることを目的として継続的にとり組んでいる「ゆるスポ DeC ö」の研究開発及び「ゆるスポ DeC ö教室」を企画運営し、学生が教育支援者として児童の成長に関わっていく場を提供していくこととした。

2 本プロジェクトの目的

本研究の目的は、東京学芸大学の学生が小学生の放課後時間等を活用して子どもの運動時間の確保を図り、自主的に運動していくプログラム開発及びシステム構築を実践的に行うことである。加えて、2020年度及び2021年度に実施したスポーツ庁委託事業「武道等指導充実・資質向上支援事業 テーマ3：指導成果の検証」で取り組んだ、児童に放課後の運動遊び場を提供するプログラム開発を継続、実装化させることを目指した。

3 本プロジェクトの実施

2か年に渡るプロジェクト研究の内容は、学校の教育活動や放課後運動遊びの場の提供及び地域における運動遊びの環境づくりを実施する

内容の開発 参加する児童への意識調査であった。開発と実践は、研究代表者である鈴木と共同研究者、先述のゼミ学生であった。プロジェクトに参画した学生の内訳は表1に示す通りである。以下、それぞれの

表1 プロジェクト参画学生の構成

所属	大学院生		学部生			合計
	2年生	1年生	4年生	3年生	2年生	計
令和4年度	4	4	7	9	7	31
令和5年度	2	5	9	7	6	29

実施内容について概要を記す。

(1) 1年次の内容

1年目にあたる2022度は、7月から研究をスタートした。実施校は、品川区立後地小学校であった。後地小学校は、2022年度、2023年度の2年間、東京都教育委員会体育健康教育推進校に指定され、児童の体力向上や生活習慣の改善に重点を置いた教育活動の推進に取り組んでいくことになっていたが、その一環として大学と連携して放課後遊び事業を展開する旨、研究室に依頼があり実施の運びとなった。ここでは、西川幸延校長、小泉満知子副校長をはじめとする体育部教員とともに制度設計を行った。大学側は、本プロジェクトに関わる教員により、児童の実態把握やプログラムの監修を行った。小学校での実施プログラムは、「後地あそびバ! ラボ」と命名した。内容開発及び運営の実際は、鈴木聡研究室院生及び学部生で実施した。システム運用は2023年1月19日から3月16日までの毎週木曜日(祝日除)14時~15時(小学1,2年生対象) 15時~16時(小学3~6年生対象)に計8回実施した。各回の内容は、表2の通りである。

表2 1年次の内容

回	日時	内容
第1回	1月19日(木)	「投の運動感覚づくり (遠投)」
第2回	1月26日(木)	「投の運動感覚づくり (制球)」
第3回	2月2日(木)	「走り方教室」
第4回	2月9日(木)	「バランスをとる運動遊び」
第5回	2月16日(木)	「跳の運動遊び」
第6回	3月2日(木)	「力だめしの運動遊び」
第7回	3月9日(木)	「用具操作を伴う運動遊び」
第8回	3月16日(木)	「ネット型ボンバーゲーム」

また、本プログラム活用については、東京都スポーツ文化事業団からの依頼を受けて、都立小金井特別支援学校を会場に、「ゆるスポ DeC ö 体験教室」を3回(10月15日、12月3日、2月18日)実施した。また、国分寺市立第九小学校からの依頼で、低学年の体育授業における体験教室を(2月21日、22日)実施した。

(2) 2年次の内容

「後地あそびバ! ラボ」の実績

2年次の「後地あそびバ! ラボ」は、2023年6月8日(木)から2024年3月7日(木)まで計21回実施した。長期休業期間中以外の毎週木曜日(祝日除)14時~15時(小学1,2年生対象) 15時~16時(小学3~6年生対象)に、希望者が自由に参加する形態とした。持続可能性を探るため、フライヤーを作成し研究室以外の学生の参画を募った(図1)。後地小学校の近隣に住む学生から応募があった。会場は、校庭を基本とし(図2)、雨天時は体育館であった。実施に向けて、以下のことを後地小学校と確認し、学校から保護者に周知した。

- ・東京学芸大学の学生が中心となって、当日の企画や運営を行う。
- ・児童は各クラスで帰りの会終了後、受付(出席の場合は名簿に○を記入)を行ってから参加する。
- ・一括して保険に加入する。万が一、参加中にけがをした場合には、保険の適用対象となる。
- ・体を動かすため、運動しやすい服装で参加する。



図1 学生募集のフライヤー



図2 後地あそびバ! ラボ

児童の参加人数平均は、低学年は 48.7 人（42％）、中高学年は 27.1 人（12％）であった。4 回目（9 月 7 日）以降の各回の参加人数は、図 3 に示す通りである。学生の参加は、毎回平均 4.5 人だった。各回ともに、準備運動、運動の内容の説明、実施、動きの工夫や作戦タイム、実施、整理運動、片付けを 50 分間で行った。参加した学生は、各回の運営にあたりとともに、児童の反応や様子を記録し、次の回に引継ぎを行った。また、学生の代表 1 名が後地小学校副校長先生と連絡を取り合い、怪我があった場合の報告及び経緯の確認、運動内容に関する打ち合わせや修正確認を行い、他の学生に周知した。

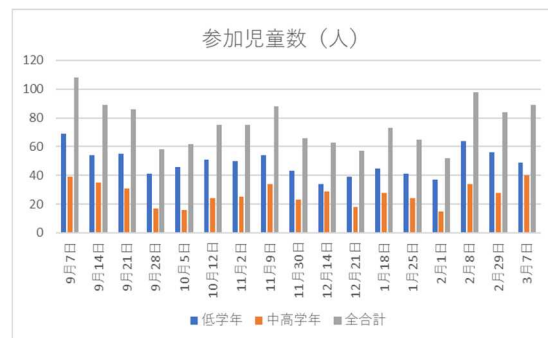


図3 参加児童数（9月7日～3月7日）

「ゆるスポ DeC ö」開発と教室の実施

2 年次は、「ゆるスポ DeC ö」の教室開催も重点化した。東京都スポーツ文化事業団から令和 5 年度都立特別支援学校活用促進事業「スポーツ体験教室」の依頼を受けて、「ゆるスポ DeC ö」教室を 2 回（10 月 15 日、12 月 3 日、2 月 18 日）実施した。また、NPO 法人延岡こども未来創造機構からの依頼を受け、「きらきらスポーツフェスタ」（10 月 25 日）、「ゆるスポ DeC ö 教室」（10 月 26 日）を実施した（図 4）。加えて、国立市立国立第七小学校（11 月 29 日）国分寺市立第九小学校（2 月 21 日、22 日）からの依頼を受け、授業の一環として体験教室を実施した（図 5）。いずれの回も盛況であった。取り組んだ内容は、今まで研究室で開発してきた「ラン Big キューブ」「はこびまショー」「きびーっす」「サバいばる！」「ようかい RUN ドリー」を中心に展開したが、これに加えて新しい種目の開発に取り組んだ。種目開発は 2 年ぶりであり、現役の学生にとっては初めての開発となったので、全体でゆるスポーツの概念の共有を行った後、3 チームに分かれ、作成方針検討、ルール作成、用具作成を行った。途中でプロポーザルを行い（図 4）、他チームからの評価を受けて修正を繰り返した。開発された種目は、「ひゅー ストン」「サンタクろーっす」「むちゅう de しゅうかく虫」の 3 つであった（図 7）。新種目も各教室で実施し、児童の反応を見ながらブラッシュアップしていった。



図4 学生によるトライアル



図5 延岡でのイベント



図6 国立第七小学校 DeC ö 教室



図7 今年度開発したゆるスポ DeC ö（左から「ひゅー ストン」「サンタクろーっす」「むちゅう de しゅうかく虫」）

児童への意識調査より

プログラムの実施の際に、その効果や児童の捉えを把握分析するために調査を実施した。特に、品川区立後地小学校においては、全児童を対象に、日常の運動や遊びの実態及び「後地あそびバ！ラボ」に関する意識について調査した（実施は2023年11月末）。また延岡市で実施したイベントでは、ゆるスポ DeC ö に対する意識について質問紙調査を行った（実施は2023年10月25日）。後地小学校における調査で明らかになったことを数点、以下に記す。

- ・日常的に多くの時間において運動遊びを行っている児童が多く、運動遊びをすることに好意的である。
- ・高学年は、低学年から中学年と比較すると継続的に参加する児童が少ない傾向にある。
- ・「後地あそびバ！ラボ」への参加を通して、運動遊びがこれまでよりも好きになったり、休み時間や学校以外における友達との運動遊びの機会が増得たりしたりしたと回答する児童が多い。
- ・低学年及び3年生においては、ルールやきまりを守るようになったり周りの児童に話しかけるようになったり、日常生活における他者との関わりや協力する姿勢が向上したと意識する児童が多い。
- ・参加児童の約6割は、大学生と一緒に遊ぶことが楽しかったと感じている。
- ・ルールを守らない児童がいることに対して、大学生に注意して欲しいと感じている児童や、他学年との関わりが薄いのもっと増やして欲しい等の要望があった。

4 成果と課題

2年間の研究活動を通し、学生が児童に運動機会を提供するシステム開発については一定の成果があったと考えている。本取り組みの独自性は、学生が一定のプログラムを実施することにとどまらず、交渉、企画、立案、運営、修正を繰り返していくことにある。いわば、参加から参画という関わり方であった。学生が教育支援の立場で児童と関わり、体力低下、運動時間の減少という社会的な課題の解決に向かって教育学部や教育学研究科での学びを実践に生かしたことは有意義であったといえるだろう。一方で、研究室のゼミ生が中心となって活動しているという特徴から、学生の掌握がしやすかったり、大学教員、小学校教員、学生の関係性が構築しやすかったり、連絡が密にとりやすかったりしたというシステム上の利点があったことについては言及しておくべきだろう。こうした環境が整っている場合は応用可能なシステムだと言えるが、どの学校や地域においても大学の研究室と連携できるというわけにはいかないだろう。例えば、学校における地域コーディネーター等が学生をリードアップし、まずは場を提供することから初めて少しずつ内容について検討しながら、さらに言えば参加する児童とともに活動内容を考え、実施していくようなシステムができると実現可能性が高まるのではないかな。

一方で、本学への教育・カリキュラムへの応用可能性としては十分にあるだろう。特に大学院における教職大学院と修士課程の協働という視点でカリキュラムや授業開発をしていくと、学生の活動フィールドおよび社会参画の場としていけるのではないかな。さらに本システムを持続させるために、令和6年度より本学に設置されるアート・アスレチック教育センターにおける「領域横断型研究」もしくは「地域連携研究」に位置付けていくことも視野に入れ、より充実したものに発展させていきたい。